戦争の話　タイトル未定

・タイトル候補
オペレーション・カラー
勝利の先の勝利　　その先の勝利
その先、大義ゆえ　　その先、大義ゆえに
3人の英雄
インタープリター
スイートピー

・書くにあたって
戦争の悲惨さとスピード感、どれだけそこでの出来事が後を引くかなどのマイナスイメージからそれを見た人々はそこから何を学ぶか？という観点、疑問。
戦争の影響でPTSDなどになる軍人が未だ多く社会問題にもなる昨今、どのように形で戦争が人間に影響を与えるか、各々の戦争感じ方（物質的距離、心的距離、社会的距離）を描きたい。
遠く離れた土地にいても戦争を体験してしまい、心的外傷を受けてしまうことがあるのではないか？

・参考作品
アメリカンスナイパー、ハートロッカー、マイ・ブラザー、プライベート・ウォー、クラウゼヴィッツ「戦争論」など

・あらすじ
争い続けてきた2つの大国の戦いはいよいよ佳境を迎えようとしていた。
白の国トリキストは周辺国の赤い国、黒い国、灰の国とで4カ国連合を組み、緑の国アシロアトを打倒する作戦を考案する。
そしてその戦いを円滑に進めるために連合各国の専属通訳４人が作戦室に集められた。

・設定資料、引用
フォーホースメン（ヨハネの黙示録の四騎士）6章から8章あたり
第一の騎士　白い馬に乗り、弓　勝利と支配を得る　キリスト教　勝利の上に勝利を
第二の騎士　赤い馬　剣　戦争を起こす　共産主義　剣を持って争いを
第三の騎士　黒い馬　食料制限の天秤　飢饉をもたらす　アフリカ　手にはかりを小麦1デナリオン
第四の騎士　青白い馬　灰色　疫病や野獣　死に至らしめる

トリキス帝国
トリキスト帝国
トリキストリ帝国

国名一覧

トリキスト	第一	白の国
アクストン	第二	赤の国
カフリ	第三	黒の国
ニェール、クザ	第四	灰の国
アシロアト	敵	緑の国

　コーランにて楽園の住人は緑の錦と緞子の服の描写がある、望ましい色

・登場人物　計５人

スイエ・クライトス将軍	白	男性58歳
ユード・カリオテ大尉	白	男性32歳
ゴルドウィン・ザイドリン・クルーガー軍曹	赤	男性22歳
ナナエ・リリルー准士官	黒	女性20歳
リュイ・シェイ士官候補生	灰	女性27歳

・舞台装置一例
座ったら体が隠れる机　4つ
段差を変えるためのデカい台

・全体像

1、手の平の上で

一人スイエ将軍に呼び出されたユード少尉は今回の連合作戦の一部であるinterpreter作戦の指揮を君に任せると言われる。
先の戦いで功績を上げたユード大尉の武勲を聞きつけた上層部からの大抜擢であった。
本来であればそこで昇進のはずだったが今一度実力を見極めたいという上層部の願いもあるという。
任された連合一個大隊の指揮を各国の通訳者と連携して行い、この戦争を終結に導くことを最終目標、そしてそれを見事完遂した暁には昇進を約束すると将軍は言う。
諸々の書類と機密解除キー、大きな期待を手渡されたユード大尉は
自分が戦争終結の一端を担う、それはこの国のため、繁栄のためという大義を胸にしてどこか誇らしげに部屋を後にした。

2、邂逅

白の国の作戦室に出自も出身も違う4人が集められた。
ユード大尉を指揮官に赤の国ゴルド軍曹、黒の国ナナエ准士官、灰の国リュイ士官候補生の4人である。
志は皆一緒である、それはこの戦争を終結させること。
ユード大尉はいかにこの作戦が重要なものかを他３人に説くが
いまいち届いてない様子。それでも現実は待ってくれない。
突如緊急指令のベルが鳴る、初めての共同作戦が始まってしまう。

3、隣の芝生は青い

初めての作戦は無事終わったが課題は多く残った。
この連合大隊の初陣にユード大尉は心が晴れなかった。
このような結果でいいのか、もっとうまくできなかったか、準備が足りていなかったのではないか
思考を巡らせるのを止めることができなかった。

だがそんな中他３人のあっけらかんとした態度で作戦の成功を喜んでいる姿に苛立ちを覚えた。
そんな中、退勤時間のベルが鳴る。
親睦を深めるために皆でバーに行こうと提案するゴルド軍曹、そしてそれに
賛同するナナエ准士官とリュイ士官候補生。
ユード大尉ももちろん誘われるが「私は君らほど暇じゃない」と一蹴する。

4、無知は罪

バーにて３人はお互いを知っていく。
ゴルドは赤の国の名家の生まれ3人兄弟の末っ子で強い誇りを持ち、大口叩きがたまにキズだが心に正義を宿す青年である。
ナナエ准士官は黒の国の大自然広がる土地で生まれた明るく活発。だが都会にはまだ慣れず
故郷の大家族が恋しい純粋無垢な女の子。
リュイ士官候補生は灰の国首都の隣町の出身で３人家族の特に目立ったことはなくとも勤勉家で真面目な女性。
盛り上がる３人、するとゴルド軍曹が端にいる男性に気づく。
ちょっと前に店に入ってきたカウンターに座る男性である。
注文の声とどこかで見たような姿が気になり声をかけるとやけに顔を
見せたがらない。無理やり引っぺがすとその男性はユード大尉だった。
そして無理やり4人での飲み会が始まることとなる。

5、永久凍土

目まぐるしい日々が過ぎていった。
数々の作戦が成功し、ユード大尉の任された4カ国連合部隊は順調だった。
なぜ？と聞かれれば、それは初日の夜皆で酒を酌み交わし、
お互いを知ったことがもしかしたら大きかったのかもしれない。
お互いがお互いを知り、お互いがお互いを思う、それらがいかに重要かを
ユード大尉は再認識していた。そう、どこかこの３人に情を抱いていたの

である。
そんな中、ある作戦の途中に緊急指令のベルがなる。
黒の国にて不明部隊のテロが発生。
なぜ急にそんな場所で？と誰もが思う中、その鎮圧に急ぎ1小隊を派遣してほしいとの連絡が。
だが前線も厳しく1小隊の派遣に対し、ユードは自国駐留部隊での解決を進言する。
だが黒の国は発展途上とも言えない国、相手は明らかに先進国の武器を使用しており
太刀打ちが難しい、あらためて救援を申し出される。
状況を整理するために黒の国のテロ発生場所が放送されるとナナエ准士官の様子がおかしい。
なんとそこはナナエの出身地であるという。
今すぐに救援を取り乱すナナエに対し、大局を見定める立場であるユードは今すぐ救援できない
という決断を下す。
そのかわり目の前の作戦を終えた後、必ず救援部隊を派遣することを約束する。
愕然とするナナエを見たゴルドは勝手に近くの赤の国の小隊を黒の国へ派遣する命令を出す。
自分の兄がたまたま動ける状態であるから兄を向かわせると言うのである。
感情的になるゴルドと冷静かつ怒りを抑えきれないユード、それを見かねたリュイは
とりあえずどうにかこの諸問題を解決に向かわせることが先決であるユードに進言する。
やってしまったことは仕方がない。４人で秘密作戦を急ぎ考案に解決を目指していく。
奮闘の結果、どうにか解決こそしたがゴルドの行動は完全なる違反行為である。

でも本当はその一早い行動に羨ましい気持ちとゴルドと言う人間を改めて知った、改めて見たが故、なおさら上に報告しにくい自身の気持ちに今まで味わったことがないもどかしさを覚えた。

6、夢物語

秘密作戦の後からどこかギスギスしている4人。
急にスイエ将軍に呼び出されるユード大尉。
先の戦いでのゴルド軍曹の違反行動を結局上に報告しなかったこと、総じて独断で秘密裏に作戦を指揮したことがどこからか漏れて罰則のため呼ばれたと思っていたが意外に何事もない日常会話、直々の経過報告、上の評判がいい、など当たり障りのない会話だった。
最後に次の作戦は大きな戦いで赤の国の名家であるクルーガー一族が直々に陣頭指揮を取ることとなったと報告される。
そのためにゴルド軍曹を一時的に本国に帰還し、作戦に直接参加させたいとの申し出が来ていてそれをユード大尉からゴルド軍曹に報告してほしいとのことだった。
作戦室に戻る途中の通路にて、リュイ士官候補生がどこかに連絡を取っているのを見かける。
作戦室に戻り、全員が揃ってからユード大尉は先ほどのスイエ将軍からの報告を伝える。
ナナエ准士官は私のせいだと嘆く、それを励ますようにそんなことはなく名誉の戦いに参加できることが嬉しいとゴルド軍曹は勇み立つ。ユード大尉はあくまで先の秘密作戦についてスイエ将軍から言及はなかったからきっとバレていないと説明する。兄に限ってバレることなんかないとさらに勇み立つゴルド軍曹。
そこにユード大尉へ連絡がはいる。
急ぎの帰還命令がでたため今日中に出発するというのでゴルド軍曹はしばしの別れを告げる。
別の作戦のためオペレーションに戻る３人。
数日後の朝、作戦室に一報が入る。
クルーガー一族陣頭指揮部隊の作戦失敗、部隊壊滅、そして生き残ったゴルド軍曹の帰還である。

7、青い炎
ゴルド軍曹、帰還当日。
ゴルド軍曹を明るく迎えようとした３人が見たのはゴルド軍曹の変わり果てた姿だった。
左腕で松葉杖をつき、右腕、右手の動きもままならず、左目を消失、内臓の一部損傷したとの
報告だった。
それでも日常は進んでいく、ゴルド軍曹に初めて会った時の明るさは無く、終始敬語で話すようになっていた。
作戦中に何かを思い出すように苦しんだり、叫び出す姿が頻繁に見られるようになった。
ある日、ゴルド軍曹が作戦中にまた取り乱し、リュイ士官候補生が医務室へと運ぶ。
二人きりになったナナエ准士官は思わずユード大尉へ言ってしまう。
なぜそんなに冷静でいられるのか？これは先の秘密作戦でのゴルド軍曹の違反行為への当てつけじゃないか？あまりにも酷過ぎないかと責めた。
ユード大尉が否定をしても聞く耳を持たないナナエ准士官はその場で苦悩する。
何が正しかったのか、何が間違っていたのか、こんなはずではなかった。
なぜこのようなことになってしまったのか。
リュイ士官候補生が戻ってくる、様子を確認しながら塞ぎ込むナナエ准士官に近づく。
突如、リュイ士官候補生がナナエ准士官を後ろから抱え込み頭に銃を突きつけた。
何が何だかわからない二人をよそにリュイ士官候補生は語る。
この戦争の発端や戦争自体がおかしいこと、この世の不条理や陰謀、自分達の知らないところ
で多くの仲間が血を流していること。
そしてこの戦争の本当の理由は連合3国の資源や国力を吸収するためのもので全て白の国の軍上層部が操作していること。
そんなの出鱈目だと言い返すユード大尉にすぐさま言い返す。
何も知らないのかとリュイ士官候補生が嘲笑う。

リュイ士官候補生はさあに語る、私はこの戦争をの真実を暴くために灰の国から送り込まれたスパイであり、
黒の国のテロは灰の国の仕業で黒の国で暗躍する白の国の関係者を始末する目的であったこと、
クルーガー一族を焚き付けたのも灰の国の計画の一部だったこと、
そして最後の牙城を崩すためにユード大尉が持つ機密解除キーが必要だということ。
渡さなければナナエ准士官を殺す、そして秘密作戦のことも何もかも明るみに出すと脅した。
なぜこんなことをするのかとナナエ准士官が問う、何か理由があるのではないかと。
本国に一人娘がいる、難病の娘を助けるためにはこの方法しかなかったとリュイ士官候補生は語った。
決断をしろとリュイ士官候補生が檄を飛ばす。
仲間か国か、はたまた仲間か保身か、決断を迫られるユード大尉。
銃声が鳴り響く。
倒れたのはリュイ士官候補生で、撃ったのは異変を察知し戻ってきていたゴルド軍曹だった。
まもなく戦争は終結した、だが白の国が勝利したわけではなく結果は緑の国との停戦協定であった。

9、スイートピー

バーにてゴルド准尉が飲んでいる、そこに合流するユード中佐。
ゴルド准尉が懐かしい４人の出会いの思い出を語る、当時の無礼へのお詫びも。
この戦争で自分は何を得たのか、何を失ったのか、ここが戦場なのか戦場じゃないのかすらもはや判断できない自分への苛立ちとこの先何をして生きていけばいいかわからなくなったという苦悩を明かす。
昔は昇進に夢も抱いたが昇進した今、階級に何の意味もないのではないかと感じるという。

自分は頭が良くないが、あの時の発砲が一番引き金に実感があったと語る。
けど本当はそれが正しい在り方なのではないかとも苦悩する。
ナナエのことが好きでただナナエを守りたい一心だったこと、そんなナナエはあの事件がきっかけで廃人となってしまったこと、そんな彼女を支えることもできない自分の身体がつらいこと、
戦場では誇りもなく人を殺したこと、そのせいで罰が当たり父や兄、仲間が皆死んでしまったんじゃないかと思ってしまうこと、あなたのような冷静さがあれば戦地であんな悲惨なことにはならなかったんじゃないかということ。
何も言えず力になれない自分の不甲斐なさに直面するユード中佐。
帰国の準備があるのでと先に席を立ち、深々と頭を下げ、丁寧な感謝の言葉を言いゴルド准尉は去っていった。
ユード中佐は今日ほど夜が長いと感じた日はなかった。
遠くで銃声が一回なった。

10、融解

戦争の終結と共にinterpreter作戦室も解体となった。
作戦室から去ろうと一人荷物をまとめるユード少尉の気持ちは晴れなかった。
思い出こそあるもののそれを喜べるような仲間は今は誰もおらず、
決して良い行いをしたわけでもない。
この短い期間のなかに様々なことがあった思い出を自身の中でどう消化すれば良いかを
ずっと悩み、リュイ士官候補生の言葉が頭から離れなかった。
リュイ士官候補生が死に際に渡してきたUSBの中身が気になって、思わずデバイスに差し込む。
情報はあまりにも信じられない情報が事細かく記録されていて、リュイ士官候補生の言っていた話以外にも多くの疑惑が存在していた。
彼の戦争は全て作戦室で行われていただけだった。
彼の中の戦争はまだ終わってはいなかった。

11、全ては手のひらの上で

ユード中佐はスイエ将軍の部屋を訪ねた。
そして疑惑をまとめたレポートを突き出した。
スイエ将軍は軽く目を通すとこれがどうかしたかと聞き返す。
説明を求めるユード中佐、説明も何も真実か否かは私が判断できるものではないと
スイエ将軍は答える。
続けて君にとって戦争とは何かと聞かれ答えられないユード中佐。
戦争とは一つの手段であり、政治の延長である。
政治は国民のためにある。
国の繁栄、国民が生きていくためという目的のために戦争という手段が必要だったら？
君は軍人としてそれを行う、それを担うのが仕事なのではないか？
そう詰められてもなおユード少佐は反論する。
それでも許されてもいいことではない、こんな戦争犯罪が罷り通る世の中で平和が実現するわけがないと叫ぶ。
この情報はすぐにマスコミに流して真実を人々に知ってもらうと吐き捨て、ユード中佐が部屋を後にしようとした後ろを向いた瞬間、銃声が二度鳴る。
彼の戦争はようやく終わった。

12、最終報告

今回の緑の国アシロアトとの戦争及び別名「第三次資源分配交渉」について
スイエ・クライトスが最終報告をさせていただきます。
まずは我が国が抱える労働力不足問題に関してですが、今回の戦い中に黒の国にてテロが発生しましたが黒の国は灰の国との協力体制にあることを隠しテロ自体が自作自演ではないかという疑惑及び証拠が発見されました。
この重大な裏切り行為は特殊連合規約第八条2項に違反しており、代償として黒の国の肥沃な大地ではなくそこを横切る山の鉱物、レアメタル資源の

全面提供ということで解決、合意いたしました。
連合するにあたっての黒の国への食糧の供給、インフラの整備等は約束通り行うことで移民を促し、今後も対策会議を重ねながらひとまずの労働力不足対策とさせていただきます。
続きまして軍事に関してですが我が国の軍事力をさらに強化させるため、他国からのスカウトの計画を兼ねてより実施しておりました。
隣国赤の国は脅威の一つでありましたが、今戦いにおいて赤の国名家クルーガー一族の失脚により赤の国は各都市の均衡を失い、部族間衝突間近となっております。
すぐさま我が国の特使を派遣し部族間の衝突を避けると共に政治介入を行い、この機に乗じて赤の国を解体し、領土は小さくはありますが我が国に吸収しようと計画しております。
続きまして化学部門ですが我が国へ灰の国のスパイが侵入したとの情報がありました。
こちらのスパイは既に逮捕、拷問し、灰の国へ死体の状態で盛大に送還しております。
追加の情報として報告によりますと灰の国は科学の国とも言われていますが灰の国の直属の複数の研究施設を赤の国の傭兵集団が強襲し、研究材料などの国家財産が大半が強奪されたとのことです。
我が国は現在建設中の新規研究施設が複数ありますが、そちらも完成次第新薬や新たな化学薬品の開発に一層励んでいただきたいと報告を受けております。

報告は以上です、健やかなる国家の繁栄のためにこれからも尽力させていただきたく思います。

終わり